

連載
博聞意伝 世代を超えて未来を語る

第10回

宮部 義一

〔聞き手〕

澁澤 健

〔三菱樹脂顧問〕

〔コムンス投信会長〕

戦禍をかいくぐって来た青春時代

澁澤 この「博聞意伝」は、先輩方からつぶさにお話をうかがい、それを次世代へのメッセージとして私がお伝えしていこうという趣向です。これからの『ほほづゑ』をどのようにしていこうかと、今の日本への苦言、注文といったことにもお話は及ぶと思いますが、まずは、宮部さんのこれまでの来し方からうかがいたいと思います。宮部さんが『ほほづゑ』に入られたのは早い時期でしたね。



宮部 そうです、『ほほづゑ』第四号（一九九五年・春号）から同人に加わりました。

澁澤 『ほほづゑ』に入られたきっかけはどのようなことだったのですか。

宮部 奥村有敬さんに誘われました。奥村さんとは以前一緒にアメリカに行ったことがあり、それ以来のお付き合いです。

澁澤 ご一緒にアメリカに行かれたということですが、それはどのような機会だったのですか。

宮部 あれは一九六六年だったと思いますが、経済企画庁と通産省の肝いりで、アメリカ経済の調査ということで約二カ月間アメリカ中を見て回りました。調査団の構成は約十名で、新日鉄などの大手メーカーと金融関係会社などから派遣されていました。当時日本興業銀行におられた奥村さんと三菱化成の私が三十代半ばの最若手でした。アメリカの各都市を訪れ、施設の見学に、識者の訪問にと実に多忙な調査旅行でしたが、実に楽しい旅でした。ポストンに行った折には、奥村

さんと二人で大学の経済学者を訪ねて歩きました。奥村さんは英語が堪能でしたから、当時有名な経済学者のポール・サミュエルソン氏とか新旧産業組織論のS・J・ペイン氏などを、実に気軽にアポイントを取り訪ねて歩きました。それで、その折に日本から土産として持って行ったコケシ人形を女性の秘書の方に差し上げました。あれは有効でした。非常に喜ばれましたね（笑）。

澁澤 なるほど、そういう経緯があつて奥村さんから『ほほづゑ』に誘われたんですね。

宮部 細かい経緯は覚えていませんが、私が俳句を詠んでいたこともあつて、お誘いを受けたのだろうと思います。

澁澤 俳句はいつ頃から始められたのですか。

宮部 俳句を始めたのは早いですね。昭和十七年中学三年生の時からです。ただ当時、学徒動員で工場製作所に飛行機の部品を作りに行っていました。そこで銀河（海軍の双発爆撃機）の部品を製作していました。

私たちは若干ヤケ気味で勉強がしたいと思っていました。

俳句ですが、そうした時代でもあり、私は元氣を通り越してピリピリしていたのでしようね、当時の中学の担任の先生が、「俳句を一日に三句から五句作ってくるように」と言われました。そうして毎日俳句を作られました。一種の不良化防止策でしょうね（笑）。その先生はまだ若い新任の先生で、初めて我々を担任された、身体のご丈夫ではない方でした。

澁澤 中学三年の時に俳句を始められて、その後学生時代から社会人になっても続けられたのですね。

宮部 結構やっていましたが、その時の俳句の仲間は、亡くなったり、俳句をやめてしまったりで、残っているのは私だけでしょうかね。

澁澤 そうですか。それでは宮部さんの一番若い頃の思い出はどういのですか。

宮部 今でも名残がありますが、お茶の水の聖橋から見た右側、ニコライ堂がある側の界限に、むかし父親

が営んでいた出版屋があり、昭和三年に私はそこで生まれました。だからあの界限の思い出がありますね。

ニコライ堂の鐘の音はよく聴いていました。それから牛込（市ヶ谷）に移りました。ここの牛込津久戸小学校は百十年続いている学校です。当時この小学校の子供は、勤め人の家の子はいなくて、全部商人の子供でした、一人お巡りさんの子供がいましたかね。途中で私の家は牛込加賀町に引っ越します。それでもずっと牛込津久戸小学校に六年間通い続けました。歩いて三十分以上掛かりましたね。その折のクラス会がまだに続いていて、先日も小学校百周年の集まりに行ってきました。この組は男女共学でしたが同級生が七人集まりました。その集まりの中に独身を徹した綺麗なご婦人が二人見えていました。従軍看護婦として戦地にも行かれたとのことでした。私たちの年代は、戦火真つただ中の青春でしたからね、仕方がないのかも知れません。

私にしても十六歳で海軍兵学校に入学（昭和二十年

四月一日）しましたからね。この頃は、兵学校（岩国分校）は岩国の海軍基地のそばにあり、そこでアメリカの艦載機の機銃照射を受けました。走って逃げる私の身体のすぐ横を、ババババッと弾幕が走り抜けて行きました。後で気が付くと、背中に黒焦げがありました。もう少しずれていたら命はありませんでしたね。

実際その時二、三人亡くなっています。それで八月十五日の終戦を迎えて、八月の末に（休暇名義で）帰されました。だから兵学校は半年間弱ですね。

澁澤 戦争がもう少し続いていたら戦死されていたかも知れませんか。

宮部 駄目だったでしょうね。悲惨な体験は幾つもあります。お話したように海軍兵学校に入ったのは終戦の年の四月一日ですが、その少し前の三月十日の東京大空襲を体験しています。私の家は大本営（市ヶ谷）のそばにありましたから、空襲の折にはその都度サーチライトで上空を照らしていました。三月十日の大空襲で東京市街地の東半部、東京三十五区の三分の一

以上が焼失したと言われています。当時、親戚が錦糸町（江東区）に住んでいたものから、父親と二人で握り飯を一杯持って訪ねて行きました。当然徒歩です。するとその惨状たるや言語に絶するものでした。焼けた塀の陰に母親とおぼしき人が赤ん坊を抱いた状態で真つ黒になって死んでいたり、そしてあの辺りは掘割が縦横に走っているのですが、焼夷弾の灼熱から逃れようとしたためか、水面に沢山の人が浮いていました。するとそこに舟に乗った警防団の人が来て、一体一体引っぱり上げては、「どなたかご存じありませんか！」と、見ている人たちに遺体の顔を見せて声を掛けるのです。誰からも声が掛からないと、ドボンとまた水の中に戻し、それを繰り返してゆくのです。そういう光景をまざまざと見て来ました。だから、兵学校に入っても、この戦争に勝てるとは到底思えませんでした。

兵学校で、八月六日のピカドン（原爆投下）も見ました。その頃、岩国も危ないといっているので、岩国の少し



宮部 義一

奥の大島郡久賀町に我々は疎開していました。小学校や女学校を移転させて、そこを兵舎にしていました。海を隔てた先に広島方面が望めるのですが、その時、赤い（朱色のような）大きな火球が宇宙にありました。少し距離があるためか、爆発音も風圧・振動も感じなかったように記憶しています。当時は一体何が起こったのか皆目分かりませんでした。早速、我々を指導・引率していた下士官が船で見に行き、その惨状を伝えてくれました。船で広島に近づいてゆくと、川を

宮部 いえ、母親が疎開していた妙高山の麓の信越の在に向いました。新潟と長野の境にある村で、母はこの村長の娘でした。

澁澤 すると、当時岩国からどのような経路を辿って妙高まで行かれたのですか。

宮部 まず船で柳井まで行き、柳井で無蓋の貨物列車に乗り込んでトコトコと広島を通って行きました。広島は見渡すかぎり焼野原で何にもなく、まだ酷い火傷を負った人々が水や食べ物求めて徘徊していて、ここでも悲惨な光景を目撃しました。一緒に行動していた秋田出身の友人は発ち去りかねて、広島で降りてしまいました。そして身の回りのものごとごとく人々に分け与えていましたね。……私はというと、水を求める老婆に水筒をあげて、そのまま汽車で、行けるところまで行けというので裏日本を廻って、富山、直江津を経て、三日くらい掛かって母の在家にたどり着きました。

伝ってどんどん死体が流れて来たということでした。そういう情報が次々に入って来ました。

澁澤 その久賀町の分校にはどのくらいおられたのですか。

宮部 八月の末には帰郷しましたから、島に移って一と月半くらい居たのでしょうかね。

澁澤 原爆投下から程なく終戦ですが、終戦はどのようにして知られたのですか。

宮部 これは恥ずかしい話なのですが、分校長が全員に集合を掛けて、整列した我々に「陛下は、なお一層頑張れと仰せである」と言ったのです。終戦の詔勅を聞き間違えていたんですね。確かに当時のラジオはピーピーガーガーと、陛下のお言葉が雑音と一緒に流れてくるのですから聞き辛かったのですが、それでも、「何だかおかしいなあ」という思いは抱いていました。そして、その挙句「先程のは間違い！ 校舎に戻って学習！」という顛末でした。

澁澤 そうして東京にもどられたのですか。

戦後復興と高度成長への道行き

澁澤 そういう悲惨な体験を経て、社会人になられたのは一九五〇年ごろですか。

宮部 いえ、中学の四年の時に海軍兵学校に行きましたので、帰って来て浪人生活を経て、高等学校の受験に行きました。戦前から、ことに戦中は、私のように中学から海軍兵学校、あるいは陸士（陸軍士官学校）に行った者がいて、海兵だけでも毎年三千人いましたので、終戦時の一高などには、海兵、陸士組みが抜けたあとの同年配の者が在校生として居ましたから、戦後帰還して高等学校を受験する者に、同年配の在校生が待つてましたとばかりに辛く当たって来ましたね（笑）。結果私は、成績は文句ないと思っていましたが一高の受験に失敗して、それから苦勞しましたが。

澁澤 それで大学はどうされたのですか。

宮部 旧制東京商科大学（今の一橋大学）です。大学を出てからは、父親が出版業を営んでいた関係もあっ

て、最初新聞社に入ろうかと思っていたのですが、当時三菱化成といった会社の試験を受けました。ところがその試験問題がユニークというか難しいものでした。難解な化学式とか数式というのではなく、「どの様に日本を立て直すか」を書けというものでした。私はレポート用紙五枚くらい書きました。それでレポートの最後に、「もしこの試験に受かったら、このような問題を出した方には是非会わせて下さい」と書きましたよ。結果試験に受かって、次の年まだ配属先の決まらないまま、入社試験の試験委員をさせられました(笑)。

それで、入社して十二年か三年目で、アメリカへの研修旅行に出して貰えました。

澁澤 すごくですね。それはどういう基準で選ばれたのでしょうか。

宮部 分りませんが、会社の上層部に一人「あいつをアメリカ研修に出してやろう」という人がいたようです。その調査団の旅行で最初にお話ししたように、奥村さんと一緒にいったのです。その旅行では、奥村

さんはアシスタントといいますが、付添人のような位置付けでしたかね。日本興業銀行の緑川さんが事務局長でしたね。それで私が三菱化成から派遣されました。

澁澤 お話がここで繋がって来ましたね。それで、その調査旅行といいますが、研修旅行の頃の、アメリカ人の日本人に対する対応はいかがでしたか。

宮部 その頃は、ニューヨークでは夜になるとピストルの音が聞こえていましたね。まだそういう時代でしたよ。それで、二カ月間の旅行でしたからいろいろなことがありましたが、日曜日の朝、旅行団の幾人かで行き先がなくなりましたが、ニューヨークの街を歩いていました。そしてとある教会の前で、私は黒人ばかりのお祈りの集団に掴まってしまいました。その集団の中心に今思えば、マーティン・ルーサー・キング牧師がいたんです。ただ彼らが話している言葉が全然解りません。私はいつの間にかその集団の最前列に押し出されてしまいました。その時には、言葉が解る奥村さんらがいっつの間にか消えてしまいました。私はただ黙って

彼ら信者のお祈りというか、演説を聞いているしかありませんでした。あれは二時間くらいの間だったでしょうが、そうしている内に何となく彼らの言わんと

していることが、雰囲気で分かってきました。それは、私の理解では、「これからは人数だ。我々黒人は産めよ増やせよでいこう」と、キング牧師が言っている(?)のですよ(多分)。私は、恐ろしいことを言う人達だと思いましたね。今でもその時の牧師や人々の顔と、噓せ返る彼らの体臭をはっきり覚えています。



澁澤 健

澁澤 それはすごい経験をされましたね。それで二カ月間の旅行を終えられて帰国した時、日本はどの様に映りましたか。

宮部 まだ、日本が本格的に戦後復興を成し遂げる前でしたからね。戦後の荒廃からだいぶ良くなりました。向こうは、高速道路が縦横に走り、沢山の車が疾走し、物が豊富な繁栄した社会ですからね。

澁澤 日本も、東京オリンピックを機に、高度成長に向けて走り始めた時機でしたね。

宮部 我々の調査旅行の前の年にニューヨーク万博(一九六四年・六五年)がありましたね。その折のパビリオンがまだ残っていて、それを見に行こうということとで皆で出掛けたのを覚えています。

そして、大阪万博が一九七〇年でしたね。この時初めて新幹線に幼い息子二人を連れて乗ったのですが、こういう大きいイベントがあれば、日本も大きく変わるんだなあと思いましたね。

澁澤 高度成長の波に乗り、日本の産業界も、企業も、宮部さんご自身のサラリーマン生活にしても最良の時期だったのではありませんか。そのモチベーションの根本にあるのは何だったのでしょうか。……私の父親が一九二九年生まれで、宮部さんの一歳年下なのですが、サラリーマン時代、何を楽しみに仕事をしていたのかと聞いたところ、毎月給料日にビフテキを食うことだった、と言っていました。それが当時の父のモチベーションだったのでしょうか、一カ月のご褒美がビフテキだったという、そういうモチベーションはありましたか。

宮部 そのことと言うと、私の家は、父親が一年に一度中国料理店に連れて行ってくれました。料理を盛った大きい皿がいっぱい並んで、それが一年に一回でしたね。それと、これはご褒美ということではありませんが、食べ物屋と街の歴史ということと言うと、先程も申し上げた牛込の津久戸小学校が百十周年を迎えたのですが、私が小学校に通っていた子供の頃は、当時

牛込界限には寿司屋というのはありませんでした。あの界限では寿司屋即屋台ということでしたから、その寿司屋に学校の先生が入って来られたことがあって、驚くやら、おかしいことがありました。その先生はとうに亡くなれています。

澁澤 私は小学校二年生の時にアメリカに行つて、その後大学までアメリカ暮らしなのですが、やはり何かにつけて節目の時はステーキ屋さんでしたね。アメリカはステーキが安いから、特別のモチベーションということではなかったのかも知れませんが。

宮部 私も、アメリカ旅行の時、ニューヨークのハーレムに一人でステーキを食べにいったことがありますが。大きなステーキが安いのはいいのですが、固くてフォークとナイフが曲つてしまいました。すると見ていた黒人の客が、お前馬鹿だと言わんばかりに、私からフォークとナイフを取つて、筋の部分をやまく切り分けてくれました。それにしても大きいので半分彼にあげると、喜んでいましたよ。そして宿舎に帰つて

そのことを話すと、添乗の通産省の人から、無謀なことをするなと、こっぴどく怒られましたよ。

そして、こういう面白いこともありましたよ。マイアミでコカコーラを自動販売機で買ったのですが、コカコーラが次々に出て来て止まらなくなりました。また、お釣が止らなくなりました。それで私は、管理している店に届けにいくと、「お前は本当に偉い奴だ」と言つて、半分くれましたよ(笑)。

これからは世代間をこえた共生が不可欠

澁澤 宮部さんは運の強い方なんですね(笑)。こんな楽しいお話が聞けるとは思いませんでした。……さて現在の、あるいはこれからの日本についてのお話を聞かせて下さい。

宮部 私たち世代は今日まで随分優遇された気がしますが。これからはそうはいかないと思うのですよ。『ほづゑ』にしても、今の様に耽美主義的なことをやっていてはいけないのではないかという気はしています。

澁澤 文化とかそういうことを愛でるといふことですか。

宮部 昨今、ことに今年になって特に感じることですが、墓地に行つてみて下さい。墓参する人がほとんどいませんから。最近家で不幸があつたこともあり、彼岸の中日に八柱霊園に墓参に行つたのですが、墓参する人がほとんどいませんでした。むかしは彼岸ともなると、ぞろぞろと皆で先祖や親族の墓参りに行つたものですよ。今は彼岸の中日に墓参りに来ている人はほとんどいません。みんな遊びに行つてしまうのですかね。遊びのために休日を作つてくれたくらいに思っているのでしょうか。そして、大きな立派なお墓ほど人が来た形跡がない。お墓がゴーストタウンになっています。

澁澤 それは、田舎でも都会でも同じでしょうか。

宮部 どうでしょう。私の家の墓所は千葉県松戸の八柱霊園ですが。一昨年納骨をして、昨年綺麗にして立て替えたのですが、我々の他ほとんど墓参の姿をみま

せんでしたね。

澁澤 それは何が変わったということなのでしょう。

宮部 ご先祖から自分に繋がっているという意識が希薄になっっているか、まったく無くなってしまうというということでしょうね。

それから、休みの日が一日増えたという感覚なのでしょうね。昔は彼岸ともなると墓所のまわりに屋台が軒を連ねて並んだものですよ。今はそんなものは一軒もないし、駅から霊園に向って歩く姿が一つもありません。あってもバランバランですね。今年特にそう感じましたね。びっくりしました。家の墓のまわりは何処も人が来ていませんでしたね。

最近の世の中の変わり様ということでは、墓所の変わり様が一番著しいと思いますね。

澁澤 私のご先祖様の墓所は谷中なのですが、工事をしているということもあって、確かに墓参していませんね。

世の中の変わり様ということと言うと、お墓以外に

以前なら、お産した後は、お爺ちゃんお婆ちゃんが孫の面倒を見てくれていたんですよね。

宮部 そうです。バックアップしていたんです。親世代に依存しないという考えが、今の若い奥さん層に強いと思います。だから、全部自分でやろうとしてるから、見ていても、大変な苦勞です。そこのところをどうにかうまく出来ないものかと思えますよ。どうせお爺ちゃんお婆ちゃんは何もしないのですから。ゴルフでも趣味のことでも、決して悪いことではないけれども、何もすることがないからやり過ぎています。そういった思いと時間を働く若い夫婦のバックアップに充てればいいし、そろそろそうした考えを実現させなければいけないと思います。

家を建てるにしても、各世代が別箇に普請するのでなく、二世帯、三世帯共住の住環境を一緒に作ることを考えるべきだと思っっています。何かあった時には一緒に対応できるような状況になって欲しいものだと思っっています。

気になっておられることはありますか。

宮部 世の中が変わるといっても、むしろ私たちがやらなければいけないことがあると思っっていますよ。

私などはとても提唱者、リーダーにはなれませんが、是非やらなければならぬと考えていることがあります。それは、これから人口がどんどん少なくなっていくと、それなのに核家族化が進んで、拜見していると若い夫婦は随分と苦闘しています。すごく頑張っているのですが大変です。子供を親にも預けないで保育園や幼稚園に連れて行って働きに出掛け、夕方子供を引き取って家に連れて帰り、家庭を営んでいます。実に涙ぐましい奮闘ですが、残念ながら拳句は子供に裏切られるというのが現状ではないでしょうかね。私たちも夫婦二人だけと思っってやって来ましたが、齡をとってみると、やはり昔のような大家族主義に戻した方がいいと思っようになりました。そういう考え方をそろそろ実行しないといけないと思っっています。

澁澤 確かに女性の社会での活躍が言われていますが、

澁澤 確かにこれからは、総体的に人口も少なくなることで、二世帯、三世帯共住の住宅を考えていくことは必要でしょうね。

もうすでに幾つもメッセージを頂戴していますが、改めて次世代への提言、メッセージをいただけますか。
宮部 大家族主義ですね。それは不必要な干渉を一切しないということを前提に、助け合いの出来る大家族主義を実現して欲しいと願っっています。そうすれば、若い世代の、育児や家事といった人手不足が解消するでしょうし、老世代の孤立化もなくなるのではないのでしょうか。私はそのような思っいでおります。

澁澤 分りました。本日はありがとうございました。

(みやべよしかず／しぶさわけん)

(二〇一四年十月二十九日収録)